天使と悪魔

下

ダン・ブラウン

越前敏弥訳

ANGELS & DEMONS

DAN BROWN

角川文庫

天使と悪魔（下）

ダン・ブラウン

越前敏弥＝訳

角川文庫 14278

平成十八年六月十日　初版発行

発行者——井上伸一郎

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集（〇三）三二三八—八五五五

営業（〇三）三二三八—八五二一

〒一〇二—八一七七

振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——旭印刷　製本所——BBC

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

フ 33-6　ISBN4-04-295502-9　C0197

天使と悪魔（下）

ダン・ブラウン
越前敏弥＝訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

角川文庫 14278

ANGELS AND DEMONS

by

Dan Brown

Copyright © 2000 by Dan Brown

Japanese translation rights arranged with Dan Brown
c/o Sanford J. Greenburger Associates, Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

Translated by Toshiya Echizen

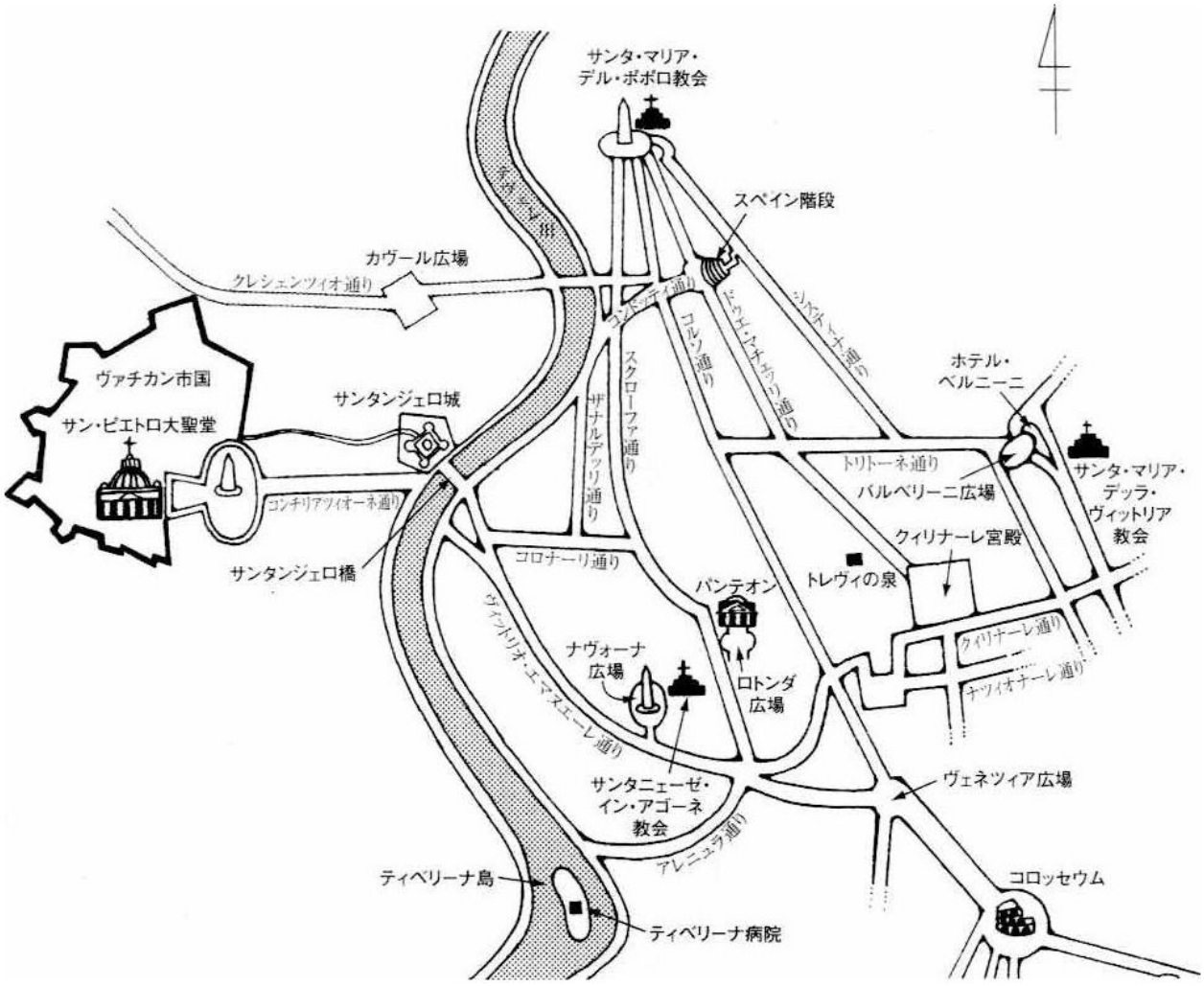
Published in Japan by
Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

著者注記

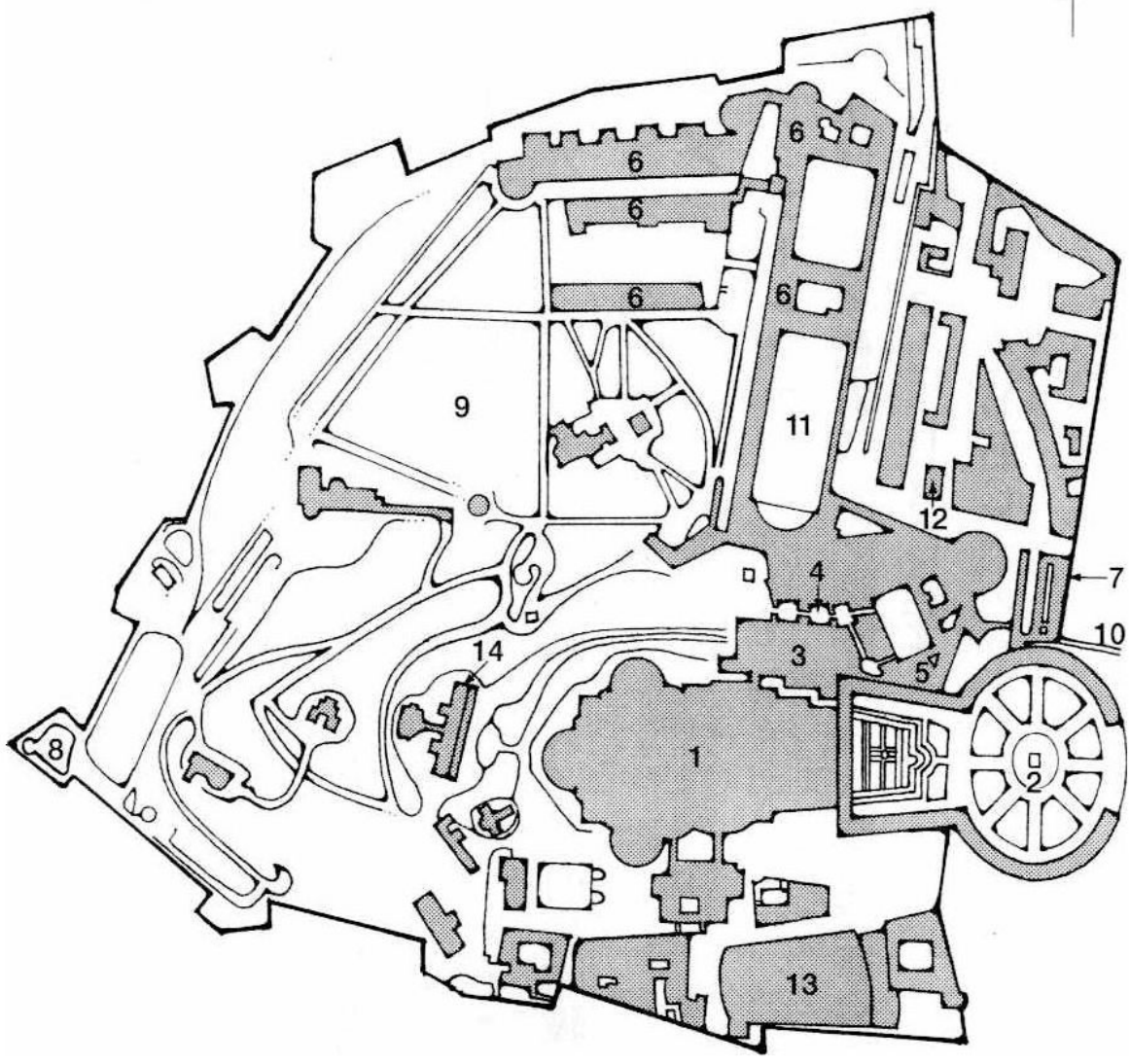
ローマの美術品、墓所、地下道、建築物に関する記述は、その位置関係の詳細も含めて、すべて事実に基づくものである。これらは、今日でも目にすることができる。イルミナティに関する記述もまた、事実に基づいている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

現代ローマ


サンタ・マリア・
デル・ポポロ教会
スペイン階段
カヴール広場
クレシェンツィオ通り
ヴァチカン市国
サン・ピエトロ大聖堂
サンタンジェロ城
コンチリアツィオーネ通り
サンタンジェロ橋
ザナルデッリ通り
スクローファ通り
コルソ通り
ホテル・
ベルニーニ
トリトーネ通り
バルベリーニ広場
サンタ・マリア・
デッラ・
ヴィットリア
教会
クィリナーレ宮殿
トレヴィの泉
コロナーリ通り
パンテオン
ヴィットリオ・エマヌエーレ通り
ナヴォーナ
広場
ロトンダ
広場
クィリナーレ通り
キッィオナーレ通り
サンタニェーゼ・
イン・アゴーネ
教会
ヴェネツィア広場
アレニュラ通り
ティベリーナ島
ティベリーナ病院
コロッセウム

ヴァチカン市国



1 サン・ピエトロ大聖堂
2 サン・ピエトロ広場
3 システィナ礼拝堂
4 ボルジアの中庭
5 教皇執務室
6 ヴァチカン美術館
7 スイス衛兵隊警備本部
8 ヘリポート
9 庭園
10 パセット(小道)
11 ベルヴェデーレの中庭
12 中央郵便局
13 謁見用ホール
14 行政庁

《主な登場人物》

ロバート・ラングドン……ハーヴァード大学教授　宗教象徴学専門
マクシミリアン・コーラー……セルン（欧州原子核研究機構）所長
レオナルド・ヴェトラ……セルンの科学者　カトリック司祭
ヴィットリア・ヴェトラ……セルンの科学者　レオナルドの娘
オリヴェッティ……ヴァチカン市国　スイス衛兵隊隊長
ロシェ……スイス衛兵隊副隊長
シャルトラン……スイス衛兵隊少尉
カルロ・ヴェントレスカ……前教皇侍従（カメルレンゴ）
モルターティ……枢機卿　コンクラーベ（教皇選挙会）の進行役
ガンサー・グリック……BBC記者
チニータ・マクリ……BBCカメラマン

92

投票三回。教皇は決定せず。

システィナ礼拝堂では、モルターティ枢機卿（すうききょう）が奇跡を祈りはじめていた。どうか候補者たちをおもどしくださいい！　すでに遅れに遅れていた。候補者のうちのひとりがいないというなら、モルターティにも理解できる。だが、四人とも？　これでは手の打ちようがない。このような状況で三分の二の票をだれかが得るには、それこそ神の業が必要だ。

外扉の閂（かんぬき）がきしんで開きはじめたとき、モルターティと枢機卿会の面々はいっせいに入口のほうを振り返った。封印が解かれるとしたら、それが意味することはひとつしかないとモルターティは知っていた。教会法によれば、礼拝堂の扉を開封できるのはふたつの場合のみ――重病人を運び出すか、遅れた枢機卿を中に入れるかだ。

プレフェリーティが来る！

モルターティの心は舞いあがった。これでコンクラーベは救われた。

しかし、扉が開いたとき礼拝堂じゅうに反響した吐息は、喜びによるものではなかった。モルターティは信じられない思いで、その男がはいってくる姿を見守った。たったいま、ヴァチカン史上はじめて、カメルレンゴが扉の封印を解き、聖なるコンクラーベに足を踏み入れたのだ。

あの男は何を考えているのか！

カメルレンゴがゆるやかな足どりで祭壇までやってきて、唖然（あぜん）とした聴衆に語りかけた。「シニョーリ、わたくしは可能なかぎり待ちました。みなさまにお伝えすべきことがあります」

93

ラングドンはどちらへ進むべきか見当もつかなかった。反射だけが、危険を逃れるための唯一の羅針盤だった。会衆席の下を這って進むため、肘と膝が焼けるように痛い。それでも、両手で掻き分けて進みつづけた。心のどこかで、声が告げている――〝身廊までたどり着けばあとは出口へ走っていけるぞ〟。けれども、それが不可能なのはわかっていた。炎の壁が身廊をふさいでいるじゃないか！　頭でほかの手段を探りつつ、ラングドンはやみくもに這いつづけた。足音は一段と速く迫っている。

予想では、最前列に着くまでに会衆席の列がまだ十フィートはつづいているはずだった。ところが、まちがっていた。なんの前ぶれもなく、ラングドンを隠していた覆いが尽きた。とたんに体が凍りつき、心の準備もないまま、半身がむき出しの状態になった。左手の壁のへこみには、その位置から見るととてつもなく大きな姿で、ラングドンをここへ呼び寄せた張本人がそびえ立っている。すっかり忘れていた。ベルニーニの〈聖女テレサの法悦〉がポルノの見せ物よろしく立っていた……仰向けの聖女が喜びに全身をそらせてうめくように口をあけ、その上から天使が火の槍を向けてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。

頭上の会衆席のどこかで銃弾が炸裂した。ラングドンは、スタートを切ったスプリンターのごとく、体が起きあがるのを感じた。燃料はアドレナリンのみで、何をしているかという自覚もほとんどないまま、いきなり走りだしていた。背をまるめ、頭をさげ、床を踏み鳴らしながら教会の前方を右へ向かって駆け抜けた。背後で銃声がつづくと、ラングドンはまたもダイビングを決行し、抑えの効かない状態で大理石の床を滑って、右壁の壁龕の欄干にそのまま突っこんだ。

そのとき、彼女が見えた。教会の後方で体を折って倒れている。ヴィットリア！むき出しの脚が体の下敷きになってねじ曲がっているが、なんとなく呼吸は止まっていない気がした。助けにいく時間はない。

暗殺者は即座に反対側の会衆席をまわって、容赦なく迫ってきた。高鳴る鼓動に、ラングドンは最期を覚悟した。暗殺者が銃を掲げ、ラングドンは自分に残された唯一の行動を起こした。欄干を飛び越えて壁龕へ転がりこんだのだ。床へ落ちた瞬間、大理石の柱でできた欄干が弾丸の雨で吹き飛ばされた。

ラングドンは半円形の壁龕の奥まで這っていき、追い詰められた動物の心境を味わっていた。眼前に見えるのはこの壁龕のただひとつの収納物で、皮肉にもいまの状況

にうってつけのものだった。ひとり用の石棺。自分用かもな、と思った。棺そのものまで似合わしい気がする。それは〝スカートラ〟――予算が少ないときに使う、飾りのない大理石の小さな箱だ。棺はふたつの大理石の支えで床から持ちあげられている。ラングドンはその隙間に目をつけ、下へもぐりこめないものかと考えた。

背後で足音が響く。

ほかに打つ手も見あたらず、ラングドンは床に体をすりつけて棺へにじり寄った。ふたつの支えをそれぞれの手に握り、平泳ぎの要領で手前に引いて墓の下の隙間へ胴体を押しこんだ。銃声が響いた。

その直後、これまでの人生で経験したことのない感覚を味わった。銃弾が肌をかすめる感覚だ。しなう鞭のようなかすれた音とともに、銃弾はすぐ横を通過し、大理石にあたって粉塵をあげた。ラングドンは頭に血がのぼるのを感じながら、隙間の奥へ向かって必死に体を移動させた。大理石の床を這い進み、棺の下から反対側へ抜け出た。

行き止まり。

いまや壁龕の奥の壁と対面していた。棺の陰のこのちっぽけな空間が自分の墓所になるのは疑うべくもない。それもまもなくだ。石棺の下の隙間から銃身が見えた。相

手は床と平行に銃を構え、こちらのみぞおちをねらっている。
はずしようがない。
わずかな自衛本能が無意識の領域をとらえたのを、ラングドンは感じた。腹這いになり、体を棺と平行に保つ。うつ伏せのまま両手を床につけると、記録保管所のガラスで切った傷が開いて激痛が走った。それに耐えて力をこめる。ぎこちない腕立て伏せで体を持ちあげ、腹部を床から離した瞬間、また銃が発射された。衝撃波とともに銃弾が腹の下を通過し、石灰質の壁を粉砕する。目を閉じ、疲労と闘いながら、雷鳴がやむことを祈った。
すると、静かになった。
銃声が消え、空の薬室が叩(たた)かれる冷たい機械音が響く。
ラングドンはゆっくりと目をあけた。まぶたが音を立てるのではないかと不安だった。身震いするほどの痛みに耐えつつ、猫のように背をまるめた姿勢を保った。呼吸をする勇気さえなかった。銃声で鼓膜が麻痺(まひ)していたが、暗殺者が去る気配が聞こえないかと耳を澄ました。音がしない。ヴィットリアを思い、助けたい気持ちで胸がうずいた。
つづいて響いたのは耳をつんざくばかりの音だった。とても人間の出す音とは思え

ない。喉から絞り出されたうめき声だ。

頭上で、石棺の片側がふいに持ちあがったかに見えた。何百ポンドの重みが揺れ動いて、ラングドンは床に突っ伏した。重力が摩擦力に勝ち、まず蓋が墓からずり落ちて、すぐ脇の床に激突した。つぎに棺が支えから転がり、ひっくり返ってラングドンの上へ落下した。

棺が倒れかけたとき、ラングドンは、棺の空洞に閉じこめられるか、へりに押しつぶされるかのどちらかしかないと悟った。脚と頭を引き寄せ、体をまるめて腕を両脇につけた。そして目を閉じ、恐ろしい粉砕のときを待った。

棺が落ちた瞬間、床全体が体の下で震撼した。上側のへりが着地したのは頭からほんの数ミリ先で、ラングドンは歯を一本残らず震わせた。右腕は確実につぶされると思っていたが、奇跡的に無傷らしい。目をあけると、一条の光が見えた。棺の右側のへりが完全には床についておらず、まだ一部が支えに寄りかかっている。だが上へ目をやると、自分がまさに文字どおり死と直面しているのがわかった。

棺の住人が真上にぶらさがっている。朽ちかけた死体によく見られることだが、棺の底に張りついて離れない。骸骨は煮えきらない恋人のようにしばしためらっていたが、やがて粘っこい音を発しつつ、重力に負けて剝がれた。それは勢いよく落ちてラ

ングドンを抱擁し、砕けた骨やほこりを目と口へ注いだ。

ラングドンが反応する間もなく、棺の下の隙間から一本の腕がやみくもに滑りこんできて、腹をすかせた大蛇のごとく這いまわった。手探りでついにラングドンの首を見つけ、絞めつけた。ラングドンは喉をつぶそうとする鉄のこぶしに歯向かおうとしたが、左袖が棺のへりにはさまれて動けない。使える腕が一本だけでは負けは目に見えていた。

動きのとれる唯一の空間へ脚を伸ばし、上にある棺の底を爪先で探した。あった。体をひねり、爪先をしっかり固定させる。首を絞めつける手の力が強くなるなか、ラングドンは目を閉じ、両脚をピストンのように一気に伸ばした。棺がほんのわずか、しかし、必要なだけ動いた。

耳障りなきしみをあげて石棺が支えからずり落ち、床に着いた。棺のふちが暗殺者の腕を押しつぶし、くぐもった悲鳴があがった。手がラングドンの首を離れ、悶えながら引っこめられる。暗殺者がやっと腕を引き抜いたとき、石棺は最後の鈍い音を立てて平らな大理石の床へ落下した。

完全な闇。またか。

そして静寂。

ひっくり返った石棺を苛立たしげに叩く音はない。中の様子をうかがおうという気配もない。皆無だ。ラングドンは骨の山に囲まれて闇に横たわりながら、迫りくる暗黒と戦いつつヴィットリアに思いをはせた。

ヴィットリア。生きているのか。

もしラングドンが真実を――まもなくヴィットリアが経験する恐怖を――知っていたら、本人のためにも、死んでいることを願ったかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com